

Phenyl glycidyl ether とアルコール、チオールの反応¹⁾

栗原藤三郎, 武田秀雄, 伊藤秀雄

東北薬科大学²⁾**Studies on the Reaction of Phenyl Glycidyl Ether with Alcohols or Thiols¹⁾**

TOZABURO KURIHARA, HIDEO TAKEDA, and HIDEO ITO

Tohoku College of Pharmacy²⁾

(Received July 1, 1967)

The reaction of phenyl glycidyl ether with ethanol at about 80° in the presence of sodium hydroxide, sodium ethoxide, or triethylamine afforded mainly 1-ethoxy-3-phenoxy-2-propanol in 50—65% and 2-ethoxy-3-phenoxy-propanol in only 1.8%.

By the identification of oxidative products of these compounds with 1-ethoxy-3-phenoxy-2-propanone or 2-ethoxy-3-phenoxypropionic acid, which was obtained by another independent synthetic method, the structures of these compounds was proved to be the primary or the secondary alcohol mentioned above.

The reaction of phenyl glycidyl ether with ethanol in the presence of sulfuric acid resulted in the increase of primary alcohol. Without the catalyst, the reaction velocity was very low and at elevated temperature, a large amount of 3-phenoxy-1,2-diethoxypropane was formed. Thioethanol reacted well with phenyl glycidyl ether even at lower temperature than ethanol did and afforded 1-ethylthio-3-phenoxy-2-propanol. Higher thiols, however, showed poorer yields. The reaction of phenyl glycidyl ether with dialkylaminoethanol or dialkylaminothioethanol also gave corresponding basic ether-alcohols. When phenylthioglycidyl ether was reacted with ethanol or thioethanol, 1-ethoxy-3-phenylthio-2-propanol or 1-thioethyl-3-phenylthio-2-propanol was obtained in a good yield. These compounds are expected to be effective as a muscle relaxant.

Phenyl glycidyl ether (P.G.E.)に対するアミン類のエポキシ開裂反応については Carter³⁾ の Patent, Kakiuchi 等⁴⁾によって報告され, 著者等⁵⁾も種々の置換基をもつフェノキシプロパノールの合成を行なっている。しかし, P.G.E.へのアルコール類の反応については記載がなく, また P.G.E.にアミノアルコールを反応させた時に生ずるハイドロオキシアミノエーテル類はその構造上から筋弛緩剤として興味があるので著者等は, 主として塩基性触媒または酸触媒の存在下で P.G.E.とアルコールとの反応について検討した。プロピレンオキシド (P.O.)に対するアルコールの反応は Chitwood, Freure⁶⁾および Reeve, Sadle⁷⁾等によって報告され二級アルコールの生成が大部分であることが認められている。またメチル基をビニル基またはフェニルに変じたスチレンオキシドなどに対するアルコール開裂についても Guss⁸⁾等の詳細な報告があり, 電子吸引基の導入は二級アルコールの生成の増加することを報告している。P.G.E.は P.O.の α 位のメチル基にフェノキシを置換しているので γ 位の炭素へのアニオンの攻撃を多少容易にし, 特にアルカリ触媒の存在では RO⁻の結合する割合は γ 位が多いと考えられるが実験結果では P.O.の場合に比較して有意の差が認められなかった。これは不明の高沸点物質の生成が多いためと思われ, エトキシプロパノールの収率は P.O.の場合よりもかなり低下している。

a) 塩基性触媒の存在による開裂付加反応 苛性アルカリ, アルコラート, トリエチルアミンの存在で P.G.E.にエタノールを反応させると, Table I に示したような反応成績体を得る。分留によって 5 区分に分けたが Fr. I

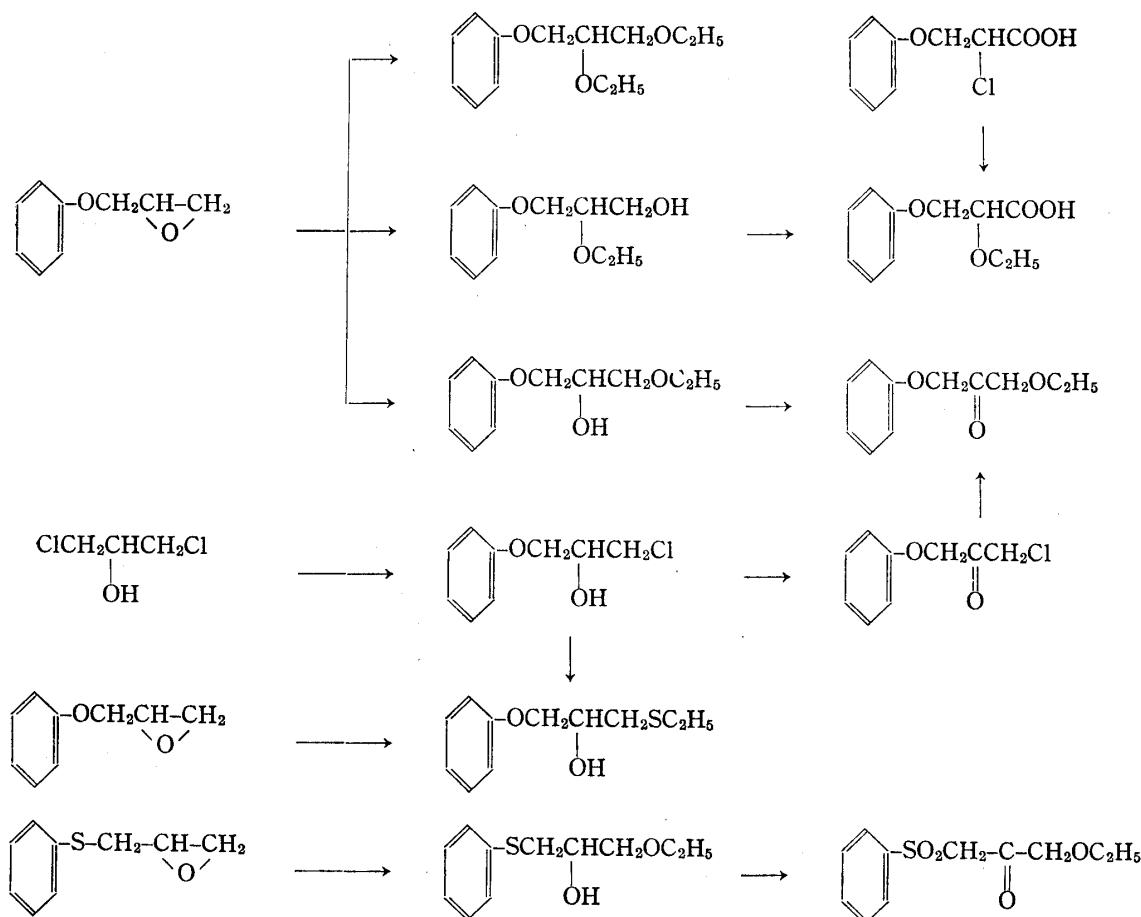
1) 本報の一部は日本薬学会第 86 年年会で発表, 仙台, 1966 年 10 月。

2) Location: Nankozawa, Odawara, Sendai.

3) Carter Product. Inc, Brit, 889,075. Feb, 7, 1962 [C.A., 52, 2145 (1962)].

4) H. Kakiuchi, Y. Tanaka, *J. Org. Chem.*, **31**, 1559 (1966).5) 栗原藤三郎, 飯野なほ子, 大沢啓助, 東北薬大研究年報, **11**, 93 (1964).6) H.C. Chitwood, B.T. Freure, *J. Am. Chem. Soc.*, **68**, 680 (1946).7) W. Reeve, A. Sadle, *J. Am. Chem. Soc.*, **72**, 1251 (1950).8) C.O. Guss, *J. Am. Chem. Soc.*, **74**, 2561 (1952); *ibid.*, **75**, 3177 (1953).

Chart 1.



は水酸基を有せず 3-フェノキシ-1,2-ジエトキシプロパンであると思われる。Fr. II は主留分で 65% を占めているが、その酸化生成物と 1-クロル-3-フェノキシ-2-プロパノールから誘導した 1-エトキシ-3-フェノキシ-2-プロパノンを同定したのでこの物質は 1-エトキシ-3-フェノキシ-2-プロパノールであることを証明できた。Fr. III はその酸化によって 2-クロル-3-フェノキシプロピオニ酸から Chart 1 のように合成した 2-エトキシ-3-フェノキシプロピオニ酸と同一物質を与えるので、一级アルコールであることを認め得た。P.G.E. とエタノールの反応温度を 150° に高めると 3-フェノキシ-1,2-ジエトキシプロパンの生成が急激に増加するのが特異的であるが、高沸点物も増加するので Fr. II, III の収率は低下する。触媒をアルコラート、トリエチルアミンに変えても Table I に示したようにほとんど同様の結果が得られる。

b) 酸触媒による反応：アルコールに対して 0.8% 重量の濃硫酸の存在下で P.G.E. とエタノールを反応させると樹脂の生成が多くなり 2-プロパノールの収率が著しく低下するが、1-プロパノールの生成はアルカリ触媒の場合の 4.5 倍に増加していることを知った。また硫酸の量を増加すると収率が低下する。

c) 無触媒による反応：P.G.E. とエタノールを触媒添加時と同一の条件で反応させるとほとんど原料を回収する。反応温度を高め反応時間を長くして、初めてある程度の収率が得られるが、3-フェノキシ-1,2-ジエトキシプロパンの生成が増加している。この物質は反応温度の上昇と比例して増加しているが、無触媒の反応ではアルコキシイオンよりもアルコール分子が求核反応を行なうために反応速度が遅く、同時に脱水によるジエトキシ体の生成が増すものと考えられる。

d) チオアルコールと P.G.E. の反応：アルカリ触媒の存在でエチルチオアルコールをエタノールと同一条件下で反応させると高沸点物質が多量に生成し、チオエーテルの収率が低かったが、50° 付近で反応させると好収量で一定沸点の物質が生成する。この物質は 1-クロル-3-フェノキシ-2-プロパノールとエチルチオアルコラートとを縮合して得た化合物と一致するので 1-エチルチオ-3-フェノキシ-2-プロパノールであることが確認できる。一级アルコールと思われる留出部はきわめて微量であった。しかしチオアルコールの炭素数の増加にしたがって

トに XIII) の 4.3g を加え、水浴中 2hr 還流後、EtOH を除去し、ether で抽出し、ether 層を H, 2.27. Found: 乾燥後、減圧蒸留する。bp₃ 116—118° 無色油 3.2g を得。IR cm⁻¹: ν_{C=O} 1705. Anal. Calcd. C₁₁H₁₄O₃: C, 68.02; H, 7.27. Found: C, 58.13; H, 7.22. 2,4-dinitrophenylhydrazone mp 275—279 (Decomp.) Anal. Calcd. C₁₇H₁₈O₆N₄: C, 54.54; H, 4.85; N, 14.97. Found: C, 54.83; H, 4.92; N, 15.05. 本物質は I) の Fr. II の酸化生成物と IR は全く一致する。

XV) 2-Ethoxy-3-phenoxypropionic acid 2-クロル-3-フェノキシプロピオン酸¹²⁾ 4.9g とエチルアルコート 1.5g を無水ベンゼン 15ml 中で 4hr 還流する。冷後塩酸酸性とし、ベンゼン抽出し、ベンゼン層を乾燥後、溶媒を濃縮し、析出した粗結晶を 80% EtOH より再結晶。mp 69—70° 白色板状晶、3.8g IR cm⁻¹: ν_{C=O} 1753; ν_{C=O} 1708. Anal. Calcd. C₁₁H₁₄O₄: C, 62.84; H, 6.71. Found: C, 62.61; H, 6.68. 本物質は I) の Fr. III の酸化生成物と IR は全く一致し、混融試験でも融点降下を示さない。

謝 辞 本研究に当り元素分析を担当された東北大学薬学科中央分析室の諸氏と本学 梶原房夫氏に深謝致します。

12) F.W Hoffmann, *Chem. Ber.*, **95**, 2086(1962) [C.A., **57**, 15062(1962)].